

平成 23 年度 第 1 回まちづくり評価委員会 会議概要

■日 時：平成 23 年 8 月 16 日（火）13:30～15:30

■場 所：消防局庁舎 3 階第 2 会議室

■出席者：（委員）

石原委員、大武委員、小畑委員、川名委員、木村委員、永田委員、西原委員
細野委員長、松本副委員長、森川委員（50 音順）

（事務局）

松谷政策推進部長、松田政策担当課長、宮川主査、檜山主査、小川

■傍聴者：なし

■資 料

- ・資料 1 まちづくり評価委員会の概要
- ・資料 2 横須賀市基本計画重点プログラム関連資料
- ・資料 3 基本計画重点プログラム市民アンケート報告書（速報版）
- ・資料 4 基本計画重点プロジェクトの目標と重点事業の実施状況
- ・参考資料 横須賀市まちづくり評価委員会報告書（平成 21 年度）
- ・横須賀市基本計画（2011～2021）
- ・横須賀市実施計画平成 23 年度（2011 年度）～平成 25 年度（2013 年度）

■議事内容

1. 辞令交付
2. 委員長、副委員長選任
3. 政策推進部長あいさつ
4. 委員および事務局紹介
5. 委員会の公開等について
6. まちづくり評価委員会の概要について（資料 1）
7. 基本計画重点プログラムについて（資料 2）
8. 重点プログラム市民アンケートの概要について（資料 3）
9. プログラムごとの検討
 - （1）重点プログラム 1 『新しい芽を育む』
～子どもを産み育てやすいまちづくり・人間性豊かな子どもの育成～
 - （2）重点プログラム 2 『命を守る』
～誰もが活躍できるまちづくり・安全で安心なまちづくり～

概 要

(開 会) 13 : 30

- ・ 松田政策担当課長の司会のもと、資料確認を行った。

1 辞令交付

- ・ 松谷政策推進部長から各委員に辞令書の交付を行った。

2 委員長、副委員長選任

- ・ まちづくり評価委員会設置要綱第4条第2項により、委員長に細野委員、副委員長に松本委員を指名した。

3 政策推進部長あいさつ

- ・ 皆さまこの度は、まちづくり評価委員会委員にご就任をご快諾いただきありがとうございます。
また、細野委員長、松本副委員長には、本委員会の取りまとめ役をお引き受けいただき、ありがとうございます。

(基本計画について)

- ・ さて、横須賀市では、本年4月から、議会の議決を経て新たな基本計画がスタートしました。
- ・ この基本計画は市政運営の指針となるもので、今後11年間の横須賀市の向かうべき姿と、そのために実施すべき基本的な政策・施策を体系的に示したものです。
- ・ 一方、本市は今、人口減少や少子高齢化などの問題に直面しておりますが、そういった中で、横須賀市を持続可能な都市として盛り上げて行く、それを強力に推進するために重点プログラムというものを定めました。

(評価委員会の役割について)

- ・ この評価を皆様と一緒にしていくという役割を委員会は担っているわけですが、この重点プログラムに関して、特に市民の実感がどうなのかということを中心にご議論いただければと思っております。
- ・ 様々なお立場の方がいらっしゃいますので、そちらの方からも是非とも市民の皆様の実感について、また、それぞれの立場でお感じになったことについて是非議論いただければと思っております。

(まとめ)

- ・ 最後になりますが、3回を約一カ月間で行うという非常にタイトなスケジュールとなっております。是非とも、市がどのような政策・施策を進めているかということ、それに対して市民がどのような実感を持っているかということについて、活発なご議論をいただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

4 委員および事務局紹介

- ・ 各委員および事務局が自己紹介を行った。

5 委員会の公開等について

- ・ 細野委員長が、「まちづくり評価委員会の会議の傍聴に関する要領」について説明を行い、会議の傍聴について認めたいが異議があるか委員全員に尋ねるが、異議はなく、同要領2条に基づき、会議の傍聴が認められた。(傍聴者はなし)

6 まちづくり評価委員会の概要（進め方、スケジュールなど）について

- ・ 事務局（宮川主査）が、資料1に基づき、まちづくり評価委員会の概要（進め方、スケジュールなど）について説明を行った。(質疑等なし)

7 基本計画重点プログラムについて

- ・ 事務局（宮川主査）が、資料2に基づき、基本計画重点プログラムの説明を行った。(質疑等なし)

8 重点プログラム市民アンケートの概要について

- ・ 事務局（宮川主査）が、資料3に基づき、基本計画重点プログラム市民アンケートの概要についての説明を行った。(質疑等なし)

9 プログラムごとの検討

(細野委員長)

- ・ 今の概要に基づきまして、具体的な重点プログラムの検討に入りたいと思います。
- ・ 重点プログラムは1から5までありますけれども、今日は2まで時間を取っております。プログラム1および2についてこれから議論して行きたいと思います。最終的には、持続的な発展を遂げるために必要な都市の魅力或いは都市力について検討していき、最終的にこれを実現するためにどうしたらいいかということについて、我々で評価していくということになります。

(1) 重点プログラム1 『新しい芽を育む』

～子どもを産み育てやすいまちづくり・人間性豊かな子どもの育成～

(細野委員長)

- ・ それでは、『新しい芽を育む』について、今年度のアンケート結果などを議論の材料としていきたいので、アンケートの結果について事務局から説明をしてもらってから議論に入りたいと思います。

(事務局：宮川主査)

一 説明

(細野委員長)

- この基本計画はまだ始まったばかりですので、まだまだ定着した評価ではございませんが、3年間に渡りその推移を見て行くということですので、アンケートを参考にしながら、実際はどうかということについて、ご意見をいただければと思います。小畑委員はどうでしょうか。

(小畑委員)

- 1-1の子どもを産み育てやすいまちに関してですが、D I がプラスの傾向があるということは、小学校に上がる前の子どもがいる家庭で、保育園の待機児童の数が横須賀では多くないということがある程度評価されているのではないかと感じました。
- もう一点は、保育園に通っているお子様の保護者の収入割合によって保育料が決まってくる訳ですが、横須賀は市の方である程度配慮されているのかなと感じました。私の部下が横浜にいますが、横浜の場合は保育園に入るのが難しく、ある一定の収入を超えると保育園の入園の順番が下がるということを知っています。それがD I にも表れているような気がします。
- しかし、一方で気になるのが、26 ページ(資料3)に以前との比較がありますが、以前との比較で「変わっていない」を選んでいる方が非常に多いことです。この方たちが無関心なのか、それとも自分たち教育者の仕事が評価されていないのか、この数値の意味が気になるところです。
- また、重点事業の中で、小中一貫校、諏訪小学校の建て替えなどがありますが、今一番求められているのは支援教育推進事業だと思います。各学校に支援介助員という方が派遣されていますが、予算としてはかなりあるものの、十分な時間数が確保できていない。どうして、こういう方が必要かといいますと、最近はADHD(注意欠陥・多動性障害)の子どもや、その傾向がある子どもが増え、また、特別支援学級よりは普通学級で健常者と一緒に学びたいと希望する人が多くいます。そうすると担任一人での対応が難しくなり、自分の学校でも毎日支援介助員に来てもらっています。しかし、現場の実態として支援介助員の時間数は不足していて、この時間の確保が必要だと感じています。
- アンケートの中で回答理由がございまして、30 ページ(資料3)をご覧くださいますと「④あまり思わない」「思わない」の理由の中で「教師の資質」というのがあります。
- もう一つは以前との比較の中で、「学校教育の質の低下」、「地域との連携不足」が挙げられておりますが、私どもはなるべく学校の情報を地域の皆様、保護者の方になるべく早く発信しながら、学校を運営していきたいと思っておりますが、こうした意見が出るということは、まだまだ努力が足りないのかなと考えております。
- 「教師の資質」についてですが、横須賀市におきましては団塊の世代が段々退職していきます。私どもの学校でも特別学級を含めて25学級ありますが、その3分の2以上の学級で20代、30代前半の教師が担任をしております。そしてその比率が段々と上がってきておりますので、教師の資質の部分では教育委員

会と連携しながら、なんとか向上を図りたいという思いはありますが、ふた昔前、30年前の教育界と異なっております。

- ・ 私どもの担任は勉強を教える、生活の指導をする、テストに○を付ける、評価をする、そしてなおかつ保護者の対応がありまして、特に保護者の対応に関しては非常に若い教員、つまり入って一年目の23歳の教師が努力してもすぐに出来るようにはなりません。そういうところから、なるべくベテランの教員を組ませるようにはしていますが、若干これについては時間がかかると思っております。

(細野委員長)

- ・ ありがとうございます。教育の現場から、以上のような報告がありました。非常に大事な問題で、例えば八王子などでは地域支援学校、コミュニティスクールがあります。地域の人達が学校の運営に協力をするというものですが、そういったことも考えていかなければなりません。

(小畑委員)

- ・ 日野市や八王子市、足立区におきましては、コミュニティスクールを運営しておりますけれども、実現にあたって10年以上の準備期間を設けております。また、武蔵村山市におきましては、小中一貫校を立ち上げました。実際ハードの面でも同じ敷地内に小学校、中学校を建てて教育を行っております。
- ・ その武蔵村山市では5年間以上の期間をかけて小学校1年から中学校3年までの9年間のカリキュラムを作っております。武蔵村山市で特徴的なのは、カリキュラムの教科自体は教員が教えるのですが、教科ごとに必ず大学の先生や他市の有名な指導主事をアドバイザーとして付けています。
- ・ 横須賀市においても小中一貫教育ということで、本年度から教科において9年間の学びを考えたカリキュラムを作っておりますが、1年で作るというのは個人的には難しいかなと感じています。
- ・ 来年度は領域別として、道徳とかの特別活動を計画しているようですが、長いスパンでカリキュラムを考えていかないといけません。

(細野委員長)

- ・ ありがとうございます。まだたくさんあると思いますが、少し他の委員にも聞いてみたいと思います。さて、合計特殊出生率などの指標がありますが、他の市と比べて1.2というのが高いのか低いのか、また若い世帯を横須賀市が呼び込むには、どういうまちが「子どもを産み育てやすいまち」なのかを考えていかなければなりません。これについて川名委員に伺いたいと思います。

(川名委員)

- ・ 今、子育て真っ盛りの母親たちとお付き合いさせていただいていますが、母親たちの中では他都市と比べて子どもの数が多いです。横須賀は大体3人以上の子どもがいて、同じ母親クラブの中では6人の子どもいる母親もいます。ただ、出生率が低いのは、結婚していない、まだお子さんをお持ちでない方々が他都市よりも多いためではないかなと思っています。
- ・ 横須賀は、他都市よりも同居率が高いので、その分子どもが多いのではない

でしょうか。同居になると家賃が浮いて、子育てにその分回すことができますし、同居人の手も借りられますので、子育てがしやすいのだと思います。

- また、アンケートの中で、世代間の答えの格差が出ていて、「子どもを産み育てやすいか」ということに関する実感が、マイナスの値になるのが、比較的高い世代の人たちになっています。これは、横須賀市に対してというよりも、今の子どもや、今の親の育て方に対して批判的な意識があるのではないかと思います。
- ニュースの報道などでモンスターペアレンツなどがクローズアップされていますが、あれは特殊なケースで、周りを見ますとそういった人は少ないように感じています。しかし、そういった目で今の子育て世代を見ているのが、こういう数字にも表れたのかなと思います。
- それから世帯別構成で、現在が「子どもを産み育てやすいまち」かに対して、小学校や、中学校の子どもがいる世帯の方が、マイナスが高くなってしまうというのは、将来の先行きの不安、これからの子育てにお金がかかる今の時代は子育てに本当にお金がかかって、特に今は塾代に本当にお金がかかって、お母さんのパート代のほとんどが塾代にかかっているということがあり、それが顕著に表れるのが小学校、中学校、特に高校受験を控えた中学生になるので、恐らくそういったことを反映しているのではないかなと思います。
- それと同時に子どもが難しくなる世代でもあるので、市の政策を念頭に置いてアンケートに否定的に答えた人もいかもしれませんが、子育てが難しいなと個人的に思っていることが、この世代の実感がマイナスに働いた結果につながったのかなとも感じました。
- また、広報の重要性を感じたのですが、市の施策を若い人たちに話しても知らない人が多くて、新聞を取っていらっしやらない家庭も多いみたいですね。それでもタウンニュースはよく読まれているみたいなのですが、細かい施策に関してはやはり知らなくて、「こういう施策があればいいのに」と若い人たちがいうことを、実は市ではもうしていたりすることがあります。こうした場合に、もっと広報活動をとということと言っても、そうした情報の受け皿がないと厳しいのではないかと思いますし、それは市でも苦労されていると思います。

(細野委員長)

- 例えば、小学校から中学校に入る世帯が、横須賀市からどこか他の市へと移っていくということは顕著にありますか。

(川名委員)

- 転勤するということなどを除けば、周りでそういったことはありません。横須賀市は価格的に家を持ちやすいところですし、外から移ってくる方はもっと広い家が欲しいという理由で来ます。横須賀市で家を持つのが厳しいので三浦市に行くということがあります。子どもがいる家庭で広い家を求めて横須賀に来られる方は多い気がします。

(小畑委員)

- 私どもの学校では、転勤で横須賀市を出るというのは結構あります。横須賀市が嫌だというのではなく、仕事の都合で出られる方の転校は多いです。

(細野委員長)

- 学力が不安なので、外の市に移るという傾向はないと考えてもよろしいですか。

(小畑委員)

- そうですね。学力が不安なので市外へ移るというのはありません。

(永田委員)

- 私も小学校、中学校、それから高校も横須賀市で過ごしましたが、小学校から中学校に上がるにあたって中学受験をするという友達は何人かいましたが、その家庭が一家そろって市外に出て行くという例はありませんでした。
- もちろん横須賀市内の学校に行かないという例はあるかと思いますが、それが理由で家庭ごと外へというのは、あまり私の近くではなかったです。先ほど受験を控えた世代が塾へというお話がありました。私は横須賀市内でアルバイトの塾講師をしています、塾へ通われるお子さんは多いです。そうすると3万円～4万円塾の月謝がかかってしまいますので、費用面の不安が数値でのマイナス面に反映されたのかもしれない。

(細野委員長)

- そうすると、横須賀市の個別的な傾向でなく、全国的な傾向が出たと考えてよろしいですか。

(永田委員)

- もちろん全国を調べた訳ではないですが、どの地域でも同じような傾向はあるのかなと思います。

(川名委員)

- おっしゃるとおりだと思います。横浜市に友人がおりますが、教育費、塾にお金がかかると言っていました。

(木村委員)

- 私は、子育てはとうの昔に過ぎてしまいましたので分かりませんが、川名委員がおっしゃったように行政が出している情報を知り得ない方たちが多くいるのは分かります。
- 昔は町内会の活動などの町で活躍されている隣近所とのコミュニケーションが多かったですが、今は町内会に入っていない人が団地の中にいたりして、コミュニケーション不足でこうしたデータにも関心がない方が多いのではないかと感じます。
- こうしたコミュニケーションに対して、子育て中の家庭の関心が低いというのが実態ではないかという気がいたします。関心が低いので、そういった場にも出てこない。隣近所の方々と話しますと、町内会に入っていないくて、父兄会にも出ないようなお母さん方が多い気がします。

(細野委員長)

- ・ 事務局に質問なのですが、このアンケートは母集団を満遍なく採っていると考えていいのですか。それとも、非常に関心がある人たちがこのアンケートに答えてくれたと考えた方がいいのですか。

(事務局：宮川主査)

- ・ 調査の方法に関しましては、各市民といいましたが、各地域と、年齢と、男女を地域ごとに按分して、各地域に送っております。ただ、回答につきましてはアンケートの 82、83 ページご覧いただくと、回答者の属性が出てきますが、割合としては、答えていただいているのは 50 代、60 代の方が多いように見受けられますので、そうした認識でいただいた方がいいかと思います。

(細野委員長)

- ・ 分かりました。事務局にお願いしたいのですが、学齢期を迎えた世帯が、転入・転出でどう変わって来ているのかというのを次回示していただければと思います。アンケートも大事ですが、具体的な数字としてどう動いているのかを委員が知る必要があると思います。

(森川委員)

- ・ 私は中学校までは横須賀の学校にいたのですが、高校からは横浜の高校に通いました。その高校は英語に力を入れている高校だったのですが、同じように何か特殊なスキルや自分に興味のある分野を学びたいという人は、その選択肢がなければ、横須賀を離れるということが多いのかなと思います。
- ・ また今回のアンケートに反映し切れなかったという点について、アンケートに答えてくれた方の年齢の比率を見ても、学生自身というよりは子育てをしている方が多いと感じているのですが、育てられるというよりは若者が自分で自分を育てていくというか自身の興味関心を伸ばしていくということに関して、市として広報活動など、何か手助け出来ればいいかなと思っています。
- ・ 横須賀は姉妹都市がアメリカ、オーストラリア、フランス、イギリスにありまして、毎年夏に高校生が 8 人選ばれて派遣されるというプログラムがあるのです。そういった話を知人にすると、「行きたい」という人が多いのですが、それを知らなくてタイミングを逃してしまうことがあります。そういう情報は若者同士の口コミで伝わるという部分があると思うのですが、父母の世代でも「うちの子に行かせたい」となったりするように、あらゆる層に対する P R や、市が取り組んでいることのアプローチが出来ればいいかなと思います。

(細野委員長)

- ・ なるほど。そういう外国に行く経験というのは、人間性豊かな子どもを育てるにあたって刺激剤になると思うのですが、このアンケートでは現在の状況はあまり高い評価ではないですね。

(森川委員)

- ・ そうですね。特に人間性豊かな子どもの育成の部分で資料 3 の 30 ページを見ても、「④あまり思わない」「⑤思わない」の中で施策に特徴がない、成果が見

えないという人がいますが、横須賀市として特徴的なことをやっているにもかかわらず、そうした情報に受け手としてアンテナを張っていない現状があると思います。

- 一方で、以前との比較で、「①思う」人が英語教育をしっかりとやっているという実感を持っていて、アンテナを張っている人と張っていない人のズレがあると思います。市の特色を生かした施策に触れていくことによって、「人間性を豊かな子ども」の実感も上がって行くのではないかなと感じました。

(細野委員長)

- 大武委員はいかがですか。

(大武委員)

- 子どもを育てるということに関してですが、市民病院の産科や助産師のことといった、物理的な問題がどうクリアされるかということが一般市民の心配なのかなと思います。
- 横須賀は地域性がある古くから住む人がずっと住みながらときに団地が造成されますが、団地に住む世帯の特徴で、入ってきたその人は動かない傾向にあって、その子どもは外に出ていってしまうので、どうしても高齢化する傾向にあります。
- また団地は子どもが少なくて、子どもがいるのは 10 世帯で 2, 3 世帯くらい感じます。子ども同士で交流する場もなく、母親を介して交流する場を設けようとして、地域によっては「キューピーくらぶ」のような団体を作って交流しようとするのですが、なかなか長続きしない。自分が地域の中に入って行って、自分で交流する努力をしていって、地域の人と一緒に生活していこうという気を持ちきれない世代がいるのかなという気がします。
- 横須賀は、非常に穏やかな民族性というか、競争に打ち勝つという気質ではないという実感があります。ある意味では生活しやすいという見方もできますが、本当にそれでいいのかと思っている人もいます。
- 長い目で見て、地域の、コミュニティの力をどうやって出していくかということに課題があると思います。

(細野委員長)

- まだまだあるかと思いますが、基本的には色々な問題点を摘出して、都市の魅力をどうつけるかということを、皆様にご指摘いただこうが趣旨になっております。市の悪いところを指摘していくところではなく、なるべく客観的なデータに基づいて、皆さんの考え方を出して、評価していきたいと思っております。

(2) 重点プログラム2 『命を守る』

～誰もが活躍できるまちづくり・安全で安心なまちづくり～

(細野委員長)

- それではプログラムの2の「命を守る」に移りたいと思いますので、事務局に説明を求めたいと思います。

(事務局：宮川主査)

ー 説明

(細野委員長)

- 基本計画を作ってから3月11日に震災が起こって、近頃は活断層の話もあって、安全というものに対して、リスクファクターが浮かび上がってきたようです。これはまちづくりにとって非常に大事な話ですので、この点を踏まえましてお話をしていただければと思います。
- それから、最初に「活気がない」という話がありました。例えば資料3の37ページの雇用の減少などがありますが、それを踏まえてどういう考えがあるか、ご意見をいただきたいなと思います。石原委員はどうでしょう。

(石原委員)

- 活断層の件につきましては、非常に厳しい文部科学省の発言だったと思いますが、静観するしかないかなと考えております。吉田市長のPRもありましたが、活断層があること自体は事実であって、日本全国に活断層があるわけです。そういった報道にならなかったのは残念だと思っています。
- 「命を守る」というテーマなのですが、非常に意味が広いのでどこにポイントを置いて話すかということですが、治安という意味では、特に横須賀に問題はないと思います。米軍の事件などが報道されることはありますが、あれは特異なケースであって、全体的な治安とはあまり関係がないと思います。
- しかし資料3の36ページの「生きがいに満ちあふれ命を大切にするまち」の実感ではかなり厳しい回答が出ています。特に40代、50代のポイントがマイナスになっていますが、この世代が一番元気な世代で、高齢化社会を一番切実に考えているにもかかわらずポイントが低いというのは、福祉はあまり高く評価されていないということなのかもしれません。
- それと基本計画の8ページで、横須賀市と神奈川県と全国の人口の推移が出ています。横須賀市は生産年齢が1980年と比べて逆転していますが、これはどうしてそうなったのか考えた方がいいと思います。神奈川県では生産年齢人口は400万人代(477万2,542人)から600万人代(608万8,141人)に増えていきますし、全国的にも増えていますが、横須賀市は減っています。
- それは働き盛りの人が減っているということですので、それが働きがいというところに理由があるのか、子育てというところに理由があるのか分かりませんが、普通は全国や神奈川県と同じような推移をするはずなのに違うというのは何か理由があると思います。

(細野委員長)

- ・ 西原委員はご老人にとって住みよい、活躍できる場というのはどういうことだと思いますか。

(西原委員)

- ・ 横須賀は30年くらい前に東京・横浜から来た人でかなり増えた訳ですが、その人たちが今高齢化しており、一方でその人たちが町内の活動を中心となってやっています。逆に今の40代、50代の人には活躍しているかという、あまりしていないです。
- ・ 確かに忙しいといえは忙しいのですが、週休2日ありまして、ただ地域の活動には出てこない傾向に全体としてはあります。活動の中心になる人たちが高齢化している中で、もう少し若い人が出てくればいいなというのを常々感じています。
- ・ 「命を守る」というのは大変に幅広くあるのですが、町内で注意して見えますと、「防災」、「防犯」、環境つまり「まちづくり」ですね。大雑把に言ってこの3つが中心ではないかなと思います。特に最近津波があつてから、防災の中でも特に津波対策というのが急に浮上してしまっている訳ですが、まだ市も対策は出来ていません。新しい課題として今、必死になって津波対策をしています。
- ・ 今日ちょうど訓練のマニュアルをもらって来たのですが、今度の9月11日に津波の訓練を全市で一斉にやろうという話があります。大体現在98～100町内くらいで、まだもう少し増えると思いますが、それに対する関心も低いですね。でも、津波が横須賀に来ないとは言いきれません。状況によれば震源地によっては6メートル以上の津波がくるとなっているが、そうしたときにどうするかという訓練です。
- ・ ただここ（重点事業）には津波対策は盛り込まれてないですね。横須賀独自の事業として、例えば海岸の方は高潮対策とか浸食対策とかありますが、津波対策というのでも盛り込まなければならなかったのかなと思います。一番怖いのは、地震よりも火事よりも津波だということを全国的に実感して、横須賀もその例外ではないと思いますが、全国的に各地でそれに対する取り組みを始めています。
- ・ 安全・安心というのはまず防災だということです。皆さんは防犯には気持ちが入っていて、年々力を入れるところが増えていきます。恐らく過半数の町内が防犯パトロールをするといった対策していますが、防犯も防災も繋がっているということです。
- ・ 地域でやるべきことは先もいいましたが、「防犯」「防災」「まちをきれいにする」「住みよいまちにする」ということです。きれいなまちにすることが防犯、防災へも繋がってくる訳ですね。きれいなまちだと犯罪も少なくなる。犯罪を少なくするためにはまちをきれいにしなければなりません。関係ないようだけど、一番力になっている。そういうところに力を入れないといけないなということを今話し合っているところです。

(細野委員長)

- ・ ありがとうございます。この前の地震のときに一番被害を受けたのがご老人と女性だったのですね。事務局にお願いなのですが、誰も活躍できるまちづくりとなっていますが、女性がどのように考えているかというのを抜き出すことができますか。できるのなら抜き出して欲しいのですが。

(事務局：宮川主査)

- ー 事務局から可能な旨を伝える。

(細野委員長)

- ・ では次回までによりしくお願いいたします。川名委員は女性の立場から見て、安全、安心についてどう思われますか。

(川名委員)

- ・ 母親たちと話していると、まず女性にとっての安全、安心というのは子どもが1番。子どもが安全ならそこは安全で、旦那様は関係ないんです。
- ・ 今、ありがたいなと思っているのは町内会ではスピーカーを使ってパトロールをしてくれています。前回のまちづくりの提言では防犯というのは目に見える取り組みが大事だという話だったのですが、それが徐々に町内会で広がっているのではないかと思います。ただ若い女性というとは少し違って自分の身の安全ということになるのかもしれない。

(森川委員)

- ・ 私はマンションに住んでいますが、町内会のパトロールに参加したりというのはしない年代ですので、友達と一緒に帰ったりなどして、まず自分の身を自分で守るという考えでいます。

(細野委員長)

- ・ 大武委員はいかがでしょうか。

(大武委員)

- ・ 市民の一人一人が、大変な障害を持って生きることとはどういうことなのか、そうなった人に対して、どういう風に手をさしのべればいいのかということを知って欲しいと思っています。
- ・ また、防災に関して議論がされていますが、一人一人の個性が尊重される世の中で、障害を持つ人々を緊急時にどうやって支援するかという議論が地域の活動の中で深まっていないのが気になっています。

(細野委員長)

- ・ 防災といいますが、災害について我々はコントロールできませんが、減災についてはなんらかの工夫ができるのではないですか。減災は被害をどうやって少なくしていくかということですが、恐らく学校などもそうだと思いますが、子どもたちに対しても防災、減災に関して教えていかなければならないと思います。文部科学省からはそれに対して何かあるのですか。

(小畑委員)

- ・ 津波に関して文部科学省から具体的にこうなさいということは来ていませんが、そのうちにマニュアルなどは出てくるとは思います。
- ・ 津波に関していえば、横須賀市では津波のハザードマップのある地域は浦賀地域と西海岸の地域、長井とか荒崎とかそういったところなんですね。観音崎よりも内側の湾につきましてはまったく津波のハザードマップは作成されていません。
- ・ 私どもの学校の防災計画のなかには津波対策というのは昨年度全くありませんでした。今年度は作成を検討中していますが、私どもの学校は仮に今回の震災の規模の津波がきたときには避難するのは屋上しかありません。海拔 3 メートルで校舎の高さは 12 メートルですので、気象庁の通報が遅れた場合 15 メートルしかありません。通報が早い場合でも深田台の文化会館に避難するしかありません。そういう意味では新たに色々なことを考えなければならないと思っています。
- ・ 横須賀市の安全に関して、各小学校の単位で地域防災協力会議というのが、あるのですが、それがなかなか地域の町内会と一緒にできてないという状態です。市内 47 校ありますが、機能しているのは 3 校か 4 校くらいで、それは課題ではないかと思っています。
- ・ また、情報発信につきましても、神奈川県におきましては 20 年前から開かれた学校ということで、県の教育委員会から指導が来ておりまして、不審者を除けば誰でも授業をご覧いただくようにという姿勢をとっています。極端に言えば授業参観の日であってもそういう姿勢であります。
- ・ 情報発信で大切なのは情報を早く出すということです。福島原発の事故に関わって、今年度の水泳指導がどうなるのかなど、市民の方からも学校に問い合わせがあるのですね。こちらでも教育委員会と相談しながら根拠を早めに出すのですが、すると、保護者の方は心配だとか、うちの子は参加させないといった反応が返ってきます。
- ・ 先ほどタウンニュースが見やすいという話がありましたが、タウンニュースは写真があって、カラーで、字の大きさも読みやすいです。しかし横須賀市の広報を見ると、字がいっぱい、若い人には読みにくいと思います。広報の仕方をもっと考えなければならないと思いますね。
- ・ それと参考までですが、福島原発の事故に関連して横須賀市内には 10 名くらいの方が福島県から一時的に転校してきました。大体の方はもう故郷に帰るか、同じ東北の新潟の方に転居してしまったのですが、お知らせいたします。

(細野委員長)

- ・ 他にはいかがですか。

(永田委員)

- ・ 先ほど、基本計画の 8 ページの人口の話がありました。大学の授業で触れた話なのですが、ここ 20 年くらいの、各港湾の埋め立ての土地が住宅として売り出された時期と重なる部分がありまして、もしかすると例えば浦安のような、今回地震で被害を受けましたが、そういうところに移られた人もいるのかなという気がします。

- ・ また、資料3の35ページを見てください。私の住んでいる追浜なのですが、あの地区の埋め立ての地区でして、小学校も海拔スレスレにあります。今回のような10メートルを超える津波が来ると追浜地区は浸水しますので、そういった不安が追浜地区の人々は高いのかなという気がしています。私も地震が起きたときは車で国道16号を走っていたのですが、もし大きな地震があれば今通っている道路も使えなくなるという気がしました。5月という地震が起こってから2カ月後のアンケートですので、そういう不安がこのアンケートにも反映されたのかなという気がします。
- ・ 災害の対策をするとき、情報発信をするときも、難しいかもしれませんが、横須賀は海拔の高いところと低いところが極端ですので、地域ごとに分けて発信していくことが重要だと思いました。

(細野委員長)

- ・ 他にいかがですか。

(森川委員)

- ・ 今は安全、安心について多く議論されていますが、戻りまして2-1の「誰もが活躍できるまち」についてです。どちらかといえば質問と言う形になってしまっているのですが、資料3の37ページなのですが、現在について、或いは以前との比較において、「④あまり思わない」「思わない」とネガティブな回答をしている方の理由の第一に「雇用の減少・まちに活気がない」というのがあります。
- ・ ただ、アンケートを市民の方に提示したときお配りした資料、例えば資料2の方の10ページですと、民間企業における障害者の雇用者数は2005年から比べてかなり増加したと感じていますし、その後も障害者の方の雇用のためにやっている重点事業というのもあると感じたのですが、そういった上でどうしてこうしたネガティブなイメージを持っている人が雇用の減少を挙げたのかなと疑問に思っているのです、そのことを掘り下げていただければと思います。

(細野委員長)

- ・ 事務局はどのように認識されていますか。

(事務局；宮川主査)

- ・ 全体として、日本全体の活気のなさを反映したものだと考えています。横須賀市のことを答えることになってはいますが、細かい理由を見ると必ずしもそうっておらず、高齢者が仕事に就けないなどの一般的な雇用の減少が書かれているため、日本全体のことを反映したものとなっているという認識でおります。

(松本副委員長)

- ・ 先ほどの基本計画の8ページに戻りますが、人口が2000年と2005年で減っている話をされていて、生産年齢人口が1万5千人減っています。この1万5000人の生産年齢人口の減少が効いていて、この世代が転出するときは年少人口のお子さんを連れて転出しますから、アンケートに答えた市民が実感として、その減少を感じていて日本全国でなく、横須賀に活気がないという実感が出てき

たのではないかと思います。

(事務局：宮川主査)

- ・ 細かい理由のなかでは、「市内で働く場がない」や「仕事がない」とかそういった理由があります。つまり、近所で就きたいと思った仕事がないなどの実感から活気のなさという回答に繋がったと考えています。

(森川委員)

- ・ その中でもう一つ確認させていただきたいのですが、重点プログラム4の「地域経済の活性化と雇用の創出」というところでも雇用があげられていますが、それと比べた中で、今こちらで取り扱っている雇用は特に高齢者であったり障害者であったりする方の雇用ではなく、広く雇用に関して不安を感じていらっしゃるということですか。

(事務局：宮川主査)

- ・ 「命を守る」というプログラムのなかで、全体の市民がいきいきと暮らすという意味では職も当然必要になって来ますし、そういう意味での雇用環境ということを行っているのであって、「命を守る」というよりは「誰もが活躍できる」という枠組みのなかでの仕事のなさがマイナス要因として出てきているのではないかと考えています。

(細野委員長)

- ・ 資料3の39ページをご覧くださいなのですが、そこで「大きな事件や犯罪が少なく、治安が良くなっている」というのがありますが、資料2の12ページを見ると年間犯罪発生件数は減っていて連動しているんです。ところが一方で、同じ39ページの「④あまり思わない」「思わない」には「身近な犯罪の増加、住民のマナーや治安が悪化している」という理由もあって顕著な高さなんです。これをどのように考えたらいいのでしょうか。
- ・ まちの魅力というのは横須賀に対する愛着とか誇りがとても大事だと思いますが、その部分が欠落している気がします。それをどうしたらいいんだろうかということですが、そこを少しお考えいただきたいんです。
- ・ この委員会は、まちの魅力をどうやって高めていくか、その戦略を考えて欲しい。そのために外部評価するということです。

(木村委員)

- ・ 市民一人一人が住民意識を持つことが重要だと思います。例えば今クリーン活動をやっていますが、歩行喫煙禁止とあってもそこで堂々と煙草を吸っている。年配者でも若者でもそういう人がいますが、巡回している市の職員らしき人がいてもそこで堂々と吸っている。それはもう市民の感覚というか、個人の人間性の問題だと思います。
- ・ 横須賀をよくしていこうという思いがあるなら自分の庭だと思うはずだし、そういうことはできないと思うんですね。でも、飲んだ缶ビールの缶を捨てていくとか、タバコ吸いながら歩くとか、そういう人たちが多いと思う
- ・ それと関連して、40代、50代の方というのは、仕事が忙しいのか、関心がな

いのか分かりませんが、西原委員がおっしゃられましたが、横須賀市に誰もが活躍できる場というのはある訳ですね。あるのに顔を出さないだけなんです。

- ・ 自分は忙しいから町内会の活動には参加できないよという人が非常に多いんじゃないかと思います。私自身も無関心だったときがありましたが、私が住んでいるまちをいいまちにしていきたいし、他所からも来てもらいたいし、住んでももらいたいし、市民税もたくさん払ってもらいたいと思う訳ですが、そういう風に思えない場づくりを市民自身がしているという矛盾もあるんですね。
- ・ いろんな組織が啓蒙活動していますけれども、そういう活動に意識が払われない。

(細野委員長)

- ・ 担税力がある方にもっと来ていただきたいということですか。

(木村委員)

- ・ 行政もこういうプロジェクトを作って事業を展開している訳ですから、市民もこうしたプロジェクトに入っていけば活躍できる場がある訳ですね。そういった意識が少ないのかなと思います。
- ・ 環境に関しては高い値を示しているし、防災についても取り組んでいるのですが、周りに対する意識ですかね。そういった部分が欠けている気がします。

(細野委員長)

- ・ コミュニティに対する優先度なんですけど、かなり充足されているのですよね。もう充分だと思っているんですかね。その辺りが鍵になっているのかなという気がしますね。西原委員はいかがですか。

(西原委員)

- ・ 私はクリーンよこすか市民の会をやっているのですが、一つの例としてYデッキですが、昼間きれいだなと思って、夜になると吸殻が落ちていたりします。
- ・ 本当なら東京の千代田区や千葉の船橋のように、罰金を取れば少しはよくなるかなという気がしますけど、横須賀は罰金を取るのにお金がかかるので罰金を取らないということなのですね。そういった姿勢は改めてもらいたいと思います。
- ・ ただ、以前に比べれば吸殻も減って徐々によくなっています。例えば、この前の花火大会の日の翌朝に清掃をしたのですが、従前に比べると吸殻の数も半分か3分の1くらいです。行政が多少お金をかけても誘導していかなければならないのではと思っているのですが。

(川名委員)

- ・ 先ほど、石原委員がおっしゃった基本計画の8ページの神奈川県が生産年齢人口と年少人口に対して横須賀では減っているということに関してですが、京急さんにおすがりするしかないかなというのが答えなのですが。と申しますのは、横須賀はいわゆるターミナルで、三崎口のあとがないんですね。色々な県内の子育て世代の人の話を聞くと、藤沢とか相模原の人口が増えているそうです。特に藤沢が最近では増えているみたいですね。

- それに対して子育て施策がどうかというと、3年前に神奈川女性会議のパネラーをして、行政の方やボランティアの方と話した際に感じたのですが、横浜は特別で、ボランティアの人の意識も高いし、施策もしっかりしている。しかし藤沢と比べるとどうも横須賀の方が頑張っているぞと感じました。
- それでも藤沢の方が、人口が増えているのは、恐らく藤沢には平塚など、その先があって東海道線ではあちこちに行けるのに対して、横須賀にはそうしたことがないということです。ただ横須賀ではJRは厳しいものがあるので、京急さんに今後もおすがりしようと思っています。都内に通うための通勤の便利さがキーになるのではないかなという気がしています。

(石原委員)

- 利便性については高めて行かなければならないなと思っています。ただ、日産が出ていったことが非常に痛いと思ってもおりまして、人口が増えないというのは、要は雇用が減るということでありまして、それは産業が衰退するということで、まちが衰退していくということです。まちが衰退していくということは高齢者を含めてマナーといったものにしわ寄せがくるということでもあります。
- したがって根本的なところではマナーということがあるのですが、それ以上に問題なのは、いかに人口が増やすかということでして、それには年少人口を増やさなければなりません。年少人口が減っているのは全国的なのですが、増えるところもやはりあって、東京都内は増えています。沿線人口を見ると分かるのですが、横浜以北は増えています。そして、横浜より南は厳しい。この違いは認識して行かなければならないところです。
- 逆に大田区などの東京都内の23区の沿線沿いではこれ以上人口を増やしたくないというところもあります。それだけファシリティが充実していたり、まちに特徴があるんでしょう。品川区だと待機児童はゼロで、わざわざ子育て世帯がそこを選んで引っ越してまで来ます。
- そうすると横須賀市は、今は全方位型で色々な施策を打ち出しているのでしょうけれども、どこに特徴を持って生きて行くのかを考えなければなりませんと思いますね。横須賀は歴史的に特徴的なのはいい意味でも悪い意味でも閉鎖的で、高齢者との同居率が非常に高いというのは、そこに顕著に出ていると思います。それはいい意味でもあると思うんですが、どうやってこのまちの特徴として打ち出すのかというのを考えて行かなければならないのかなと思いますね。

(細野委員長)

- その辺りは次回ににぎわいをどう作るかというのでも議論されると思います。もう時間となりますが、何かございますか。

(松本副委員長)

- 子育てをしている方たちの子ども数多いということでしたが、子育てをしている女性が同居しているか、専業主婦でないと横須賀で子どもを多く産めないのかどうか知りたいと思います。重要なデータだと思いますので、専業主婦率や同居率など、そういったことが分かるデータを次回までに出していただければと思います。

(細野委員長)

- それでは事務局はそういったデータをよろしく願いいたします。時間となりましたので、これで閉会としたいと思います。

(閉会) 15 : 30

- 第2回まちづくり評価委員会の開催日時・場所を確認して閉会とした。

以上